

# 道徳科×図画工作科 学習指導案

|       |      |
|-------|------|
| 授業者   | 中野浩瑞 |
| 学年・学級 | 6年1組 |
| 場 所   | 6年1組 |

## 1 単元名 「作品を通して見る私たちの世界」

第1時：写真に込められた思いを想像しよう

第2時：作品を創る意義とは

## 2 授業者の思い

この授業は、「人はなぜ作品をつくり、それを人に見せるのだろうか？」という素朴な疑問から始まりました。私がこの問いを抱いたのは、生成 AI の急速な進化を目の当たりにしたことがきっかけです。私は普段から写真や動画が大好きで、家族、学校の子どもたち、素敵な景色などたくさん撮影しています。絶え間なく動き続ける世界の一瞬を切り取り、その瞬間をじっくりと眺めることで、言葉にできない感動や豊かさを感じることがよくあります。有名な写真家や、写真以外の作家たちが生み出す作品にも同じような感動を覚えることがあります。そんな中、生成 AI が登場しました。短いプロンプトを入力するだけで、まるでプロさながらの作品を簡単につくり出すことができる技術に、私は驚き、そして魅了されました。楽しみながら、数々のハイクオリティな作品を作ってみました。そこでふと立ち止まり、自問しました。「人が時間や労力をかけて作品を生み出すことはもう必要なくなったのか？」「いや、そうではないはずだ。人間ならではの価値の源泉は何なのか？」と。私は、これまで作品を通して感じていた感動や豊かさが、一体何から感じていたのかを考えるようになりました。作品を生み出すその過程に、何か AI にはない人間ならではの特別な価値が宿っているのではないかと。しかし、答えは簡単には見つかりません。これから子どもたちが生きていく世界では、生成 AI を含むテクノロジーがさらに進化し、何かを作り出すことが容易になるでしょう。子どもたちがそのような世界に踏み入る前に、一度、人間が何かを生み出すことの意味や価値を見つめ直すことが、今後よりよく生きていくための大切な支えになるのではないかと感じています。子どもたちは、作品を生み出すことをどのように捉えているのでしょうか。子どもたちがどんな考えを語り合うのか。私自身も彼らと一緒に、問いに向き合い、共に考えていきたいと思っています。

(中野 浩瑞)

この授業を思いついた直接のきっかけは、布袋寅泰の「Andromeda (feat. アイナ・ジ・エンド)」を聴いたことです。「涙はどこから生まれて流れて消えるの」とか「感情こそ命の確かなアイデンティティ」とか、アンドロイドと創造主の対話形式で展開される歌詞が胸に刺さりました。そこから、人間と AI の違いについてぼんやりと考えているうちに、美術教育に携わる者として、「つくる」という行為自体の意味について子どもたちといっしょに考えてみたくなりました。生成 AI の登場と急速な進化は、私たち人間に様々な問いを投げかけています。私自身、生成 AI を極端に恐れていた時期がありました。見栄えがよく完成度の高い作品がすぐにできることに子どもたちが安易に飛びついてしまうのではないかとという危惧からです。しかしながら、生成 AI で絵をつくっていくうちに、自分の感覚や行為をもとにして、「わたしが」感じ、考えた「わたしの」世界を表していくことは人間にしかできないことに気がつきました。つくる過程にこそ意味があるのだと。テクノロジーが発達した時代においては、身体性や感情の伴った「人間らしさ」や「自分らしさ」という点がよりいっそう着目されるはずで。そういう人間っていいな、私っていいなを子どもたちといっしょに語り合えたらと、授業を心待ちにしています。

(古家 美和)

私にとっての写真は、日常の中でふと出会う、「あれ？」とか「ん？」とか、「あ、」とかいう、言葉にはならないものの輪郭を採っておくことのできる手段です。そうして撮った写真を後から見返して並べ、その時感じたものを整理したり分析したりしながら、積み重ねて見えてくる世界を味わいながら作品をつくって発表しています。発表すると、感想が言葉になって返ってきて、それが最初の「あ、」という気づきのわけを読み解く鍵になることがある。そうやって作品が読み解かれて広がっていくところが、とてもおもしろいです。以前には、AIに学習されることを危惧してネット上に作品をアップするのを躊躇したこともありましたが、自分で撮った写真にも、後で見返した時に心に響かないものがあります。そういう写真は外していくのですが、その心に響く／響かない、とはどういうことなのでしょう。どうやら、「よく見せよう」とか、「こういう好きだよ、こういう感じだよ」とかいう、邪念が入って撮った写真はぱっと見は良くても、浅いのです。その匙加減は絶妙なものです。親切心が働いて「いいね」ということもあります。心に届く写真は、ただただ無条件に響いてきます。しかもそっと、静かに。AIが生成した画像が普及する以前にも、説明、証拠、欲をくすぐる…、といった写真の役割を、私たちは無意識に了解して、無防備に、また親切に受け入れています。これからはいっそう、写真の信憑性を確かめる意識が必要となりますが、見映えの良い画像が飽和していくにつれ、「静かに心に響くかどうか」に意識的になっていくのではないかと期待します。その写真が生まれた経緯や、撮った人の背景の情報が果たす役割も大きくなるでしょう。それは本来ヒトに備わっている（刺激的な情報に翻弄されがちな）感知能力を鍛え、ものごとを正しく判断する手立てとなるかもしれません。

(写真家：川瀬 一絵)

### 3 本時の展開

#### (1) ねらい

- ・人が撮影した写真と AI で生成した画像を比較することを通して、感性や想像力を働かせ、よい作品とは何かについて考え、作品の意味や価値を生み出そうとする。
- ・よい作品とは何かを考えることを通して、自分や他者の作品に込められた思いや表現を想像するとともに、人間のもつ心の崇高さや偉大さを多面的・多角的により深いところから見つめ直そうとする。

#### (2) 展 開

| 主な発問と<br>教師の働きかけ  | 学習活動と活動の留意点  | 予想される<br>子どもの反応   |
|---|--|---|
| ○この写真（作品）はどう？またどのような思いが込められていると思う？  | <b>【1 川瀬さんの作品を鑑賞する。】</b><br>・前時の自己表現としての作品の見方を働かせる。  | ・そういう思いがあるんだ。考えていくと面白いね。  |
| ○この写真（作品）はどのような思いが込められているのかな？   | <b>【2 AIで作成した作品を鑑賞する。(AIとは伝えない。)]</b><br>・「すごい」「いい作品」といった子どもの心を打ったであろう表現を捉えておく。  | ・これも撮った人の思いがあるんじゃないかな。<br>・写真も綺麗だなあ。  |
| ○この作品はAIで作りました。   | <b>【3 AIで作成した作品であることを伝える。】</b><br>・AIでの生成過程を見せることで、作る過程を知り、人が生み出す作品との創作過程との違いを捉えられるようにする。  | ・すごい。<br>・誰でもすごい作れるんじゃない？<br>・騙された。   |
| ○さっきまで、AIが作った作品も「いい」「すごい」と言っていたけど、AIとわかったとたんよい作品じゃなくなるの？<br>○人が生み出す作品と違いはあるのかな？<br>・写真以外の作品にも目を向けることができるようにするために、過去の経験の中で“いい”“すごい”と感じた作品を想起するように促す。             | <b>【学習テーマ】“いい”“すごい”作品って何？</b><br><br><b>【4 テーマについて考える。】</b><br>・小グループで考えをもつ。<br>・それぞれの意見を持ち、その後全体で意見を交流したくなったらその後全体での対話をする。<br>・テーマに対する子どもたちなりの考えをキーワード化し板書する。 | ・なんでだろう。<br>・人が作ることの方がよい気がするけど。<br>・でも自分じゃ描けない美しいものも簡単に作れるよ！<br><br>・作品を作るときに思いが入っていないかもしれない。<br>・綺麗だけれども誰でも同じものを作れるってなると…<br>・人が作品に込めた思いにすごさを感じているのかもしれない。 |
| ○見た目がよいものがよい作品？それとも違う？<br>○川瀬さんはなぜ、「AIがどれだけ美しい写真を作れても大丈夫」と思えるのだろう。  | <b>【5 川瀬さんの作品に込められた思いを知る。】</b>   | ・思っていたより複雑で、そして深いな。<br>・作品ってその人にしか作れないものなのかもしれない。   |
| ○AIを用いて作品を創る価値はどこにある？<br>○AIと本物、何が違うの？<br>○作品を他の人に見せたり、共有したりするのはなぜだろう。<br>○作品に“いい”“すごい”と感じるのはなぜ？どこから感じるの？<br>○人が作る作品にあって、AIの作品にないものは？また、AIの作品にあって、人が作る作品にないものは？ | <b>【6 学習を振り返る。】</b><br>○今日の授業で考えたことを教えてね。<br>○今日の授業は教科で言うとなんのかな？それはなぜかな？   |   |